関口コオのきり絵とドビュッシー，安部幸明のピアノ曲

―題材，表現技法とその接点―

澤　田　まゆみ

新島学園短期大学紀要 41号
（別刷）

2020年３月31日発行

新島学園短期大学紀要　第41号　81頁－93頁　2020

関口コオのきり絵とドビュッシー，安部幸明のピアノ曲
―題材，表現技法とその接点―

澤　田　まゆみ

KIRIE by Koh Sekiguchi and the Piano Pieces of Debussy, Komei Abe
― Themes, Expression Techniques and their Points of Contact ―

Mayumi SAWADA

Niijima Gakuen Junior College
Takasaki, Gunma 370-0068, Japan

要　　旨

関口コオ（1937–2018）のきり絵と，ドビュッシー（1862–1918），安部幸明（1911–2006）のピアノ曲は，子どもや自然を題材としていることと，素材の探求とその組み合わせによって，生き生きとした臨場感ある表現につなげていることが共通している。また，関口の詩とドビュッシーのピアノ曲における発想記号をもとに，「温もり」，「優しさ」，「悲しみ」という共通のキーワードを見出すことができた。関口や安部が作品に添えた詩は，作品のもつストーリーや，子どもや擬人化された事物の心情を臨場感ある表現で伝え，鑑賞者や弾き手と作品をやわらかくつなぐ役目を果たしていると考えられる。

Abstract

Kirie by Koh Sekiguchi（1937–2018）and piano pieces by Debussy（1862–1918), Komei Abe（1911–2006）are based on the theme of children and nature. They explore and combine materials to create lively, realistic expressions. From Sekiguchi's poems and the expression marks in Debussy's piano pieces, we could find common keywords such as "warmth," "kindness," and "sadness." The poems that Sekiguchi and Abe have attached to the work convey the story of the piece and the emotions of children and others in a realistic way, and play a role in softly connecting the viewer and players with the work.

1. はじめに――関口コオのきり絵との出会い

関口コオ［本名：武井功吉］（1937–2018）は群馬県安中市に生まれ，グラフィックデザイナー時代を経て 1975 年にきり絵の創作を開始，[1] 1979 年にはきり絵の活動のみに専念し，国内外で多くの個展や数々の賞を受賞した作家である。[2] また，「関口コオを囲む会」（1979 年発足）や 1985 年には「利根・沼田関口コオ後援会」，「関口コオ後援会」（高崎），1989 年の「関口コオとふるさとを学ぶ会」（安中），1990 年の「関口コオと碓氷の自然に親しむ会」（松井田）など群馬県内各地で後援会や地域の自然や文化と密着した活動が生まれファンも多く，松井田や高崎の公民館でのきり絵教室も実施された。国際的な活躍もあり，その他は末尾の資料を参照されたい。

筆者は群馬県高崎市出身であり，幼い頃より関口コオ作品に自然と触れてきた。幼少期の記憶は定かではないが，上毛新聞に 1977 年～1980 年まで作品が連載されていた他，きり絵作家としての地位を固めることとなった観光ポスター「ほのぼの群馬・上州の四季」（1979），1980 年代以降は絵葉書や磯部温泉をはじめとするポスターなど，生活の中で自然と目にする機会が多くあった。1995 年に建設された高崎市榛名文化会館大ホールの緞帳『未来への飛翔』や，『交通安全カルタ』（群馬県自動車販売店協会，1996）には大学時代に触れた記憶がある。

2010 年には筆者の故郷である高崎市箕郷町に「関口コオきり絵美術館」が開館し，2013 年 3 月に初めて訪れた際その本物の作品に触れ，当時演奏していたフランスの作曲家クロード・ドビュッシー（1862–1918）のピアノ曲と非常に近い要素を感じた。同年 10 月にドビュッシーピアノ作品全曲演奏シリーズ「ドビュッシーと音楽散歩」（於：ピアノプラザ群馬）の第 2 回にて関口の作品のスライド 14 枚と共に，ドビュッシー作曲《子供の領分》と《ベルガマスク組曲》のピアノ演奏や，関口コオきり絵美術館の並木敬子氏による作品紹介等を行い，関口の作品とドビュッシーのピアノ曲のコラボレーションを試みた。[3] 事前の関口本人へのインタビューや，当日の並木氏への質疑応答等により，その題材や素材の用い方，表現方法にドビュッシーとの共通項をいくつか見出した。また，ちょうどその頃取り組んでいた「明快で，単純化し，生き生きとし，［中略］時折は日本の伝統と近しい」（片山 2007：9）作品を書いた作曲家安部幸明（1911–2006）による，22 からなるピアノ小品集《夢の世界》（1986）とも関口の作品が響きあう部分があった。[4]

本稿は，関口のきり絵作品の特徴であると思われる要素（動き・光・憧憬）についてその背景や表現方法を考察した後，筆者の専門であるドビュッシーや安部幸明のピアノ曲の題材や表現技法等から関口の作品との接点を探り，ジャンルを超えた表現の可能性を見出すことを目的としている。

2. 関口コオのきり絵作品にみる表現の諸相

ここではまず，関口のきり絵作品の特徴であると思われる動き，光，憧憬について，その背景，表現方法の考察を試みる。

2–1　動き

関口の作品は，デザイナーや油絵の仕事の後，きり絵をするようになって「生き生きと」したものとなった。[5] 今にも動き出しそうな，まるで生きているような，臨場感あふれる作品が多くあるが，この生き生きさ，臨場感はどこからきているのであろうか。関口はきり絵の「切り口」についてその大切さを語っており，[6] きり絵独特の質感や，黒と他色のコントラストが要因とも考えられるが，実際にいくつかの作品についてみてみる。

動きそのものを描いたものとして，「あした天気になーれ」（1985 頃）の履物が空中に飛翔する線や，同時期の「雪の坂道」での竹ぞりの滑った跡，犬の足跡などが挙げられる。しかしここで注目したいのは，これらの線や跡ではなく，たとえば「雪の中」（1980）にみられるような竹ぞりの後ろに乗っている女の子の髪の毛と表情である。ここでは，その髪の毛や表情から，どのくらいのスピードなのか，またどのくらい寒いのかまでが伝わるような臨場感がある。「安中御城内御諸士御遠足の図」（1983）に関しても，動きの線といったものは何も描かれていないが，身体の輪郭あるいは影，表情，質感といったもので，力強い動きが表現され，今にも足音や心臓の鼓動，一人一人違った体温までが伝わってきそうである。関口に 1978 年の近松門左衛門「心中天の網島」公演ポスターを依頼した赤坂治績は，関口の作品について「デフォルメされた構図の見事さと，髪の一本一本を丹念に切る繊細さに驚いた。」と述べている（赤坂 1986：4）。

関口はもともと芝居や演劇が好きであり，高校時代も演劇部に所属，卒業後のデザイナー時代も演劇活動に没頭していた（関口 1983：126）。作品の背景には，場面や心情，動きをリアルに表現する演劇の世界の影響もあるかもしれない。そういった背景とは別に，技法という点では，切り口の質感を大切にした関口のこだわりや，赤坂の指摘する構図の見事さや繊細さも，動きを表現する欠かせない要素であると考える。

2–2　光

きり絵において色の配色というのは必然的に重要になってくるものであろう。関口は当初色づけに和紙などを，後に主に絵具を用いたというが，その他にもスプレーやさまざまな技法を組み合わせて表現している。

関口の作品では非常に多くの光が陰影とともに表現されており，光の表現としてとくに多く描かれているのが月である。その他「里の灯」や「月下のいさり火」（1992頃）のような灯りや，「未来への飛翔」にみられる光，「尾瀬の夢道」や「霧の記憶」（1990）にみられる靄や霧などの作品がある。きり絵の魅力について関口は「今までの既成の美術になかった新しい造形であるということ，日本人が潜在的に持っている墨に対する郷愁も大事なファクター」であると述べており（関口 1986：53），書家にもなりたかったという関口の「墨」のような黒と，さまざまな色，光のコントラストも関口の作品の魅力の一つといえる。[7] また，これらの彩色や陰影の配色とその表現には，グラフィックデザイナーとしての技術や経験も生かされていたのではないか。

2–3　憧憬

関口の作品と作風をよく表していると思われる詩がある。

風が駆けぬけて／雪は踊り／雨が飛びはねる／赤い夕陽に枯葉は舞い落ちて／
月の光／又，風／また，雪／そして，雨／自然の中に育くまれ／年はめぐって／
いつしか懐郷の思い／今，私たちは物質文明の中／失いかけし心／
人が人としての／温もりや優しさ／さびしさや悲しみをも知って／
心の世界を—。[8]

これは関口による 1994 年のきり絵集『わらべの詩』の序である。その約 10 年前の 1983 年には「何を描くのか／と，問われれば／私はただ／“幼なかった頃そのまま”」（関口 1983：23）と述べており，関口は幼かった頃の自分の姿や故郷を描いた。しかし，1997 年の作品集『きり絵の世界』では，その故郷について「女の世界—」という見出しとともに次のような表現もある。

古里／故里／そして，故郷。
生まれたところ，／育った土地。
いいえ，
私にとってのふるさと／それは／母親の胎内……。[9]

関口は作品の題材として，童が遊ぶ姿や，故郷の妙義山，「追慕—母」をはじめとした女など，童，故郷，女を多く描いた。並木によれば，関口は童と女の描き分けについて，特に意識はしていなかったという。[10] これら 3 つに共通すると思われるものは前述の 1994 年の詩の最後の言葉「心の世界」であり，対象となる題材への憧憬，

「物質文明の中」の「失いかけし心」,「温もりや優しさ」,「寂しさや悲しみ」ではないか。

3. ドビュッシーのピアノ曲と関口のきり絵作品との接点

ドビュッシーのピアノ曲と関口のきり絵作品との接点として，その題材や表現技法に着目してみる。

3–1　題材

2–3 で述べたとおり関口の作品の主な題材は童，故郷，女である。ドビュッシーのピアノ曲において子どもを題材としたものは愛娘に捧げた《子供の領分》(1906–1908）くらいで，とくに故郷や女を直接的に用いてタイトル化されたものはないが，古代ギリシャへの憧憬《前奏曲第 1 集》の〈デルフィの舞姫たち〉やルコント・デ・リール（1818–1894）の詩に霊感を得た同集の〈亜麻色の髪の乙女〉などは関口の憧憬に通じるものがあろうか。とくに注目したいのは，関口の作品で実際に多く描かれ，1994 年の詩の中でも示されている風，雪，雨，枯葉，月の光が，ドビュッシーのピアノ曲で〈野を渡る風〉,〈雪は踊っている〉,〈雨の庭〉,〈枯葉〉,〈月の光〉などタイトルとして用いられ，その様相がピアノで表現されていることである。

その他ドビュッシーの初期の作品に《スティリア風タランテラ》(1890),《マズルカ》(1890）や，古典的な舞踊を基にした作品を含む《ベルガマスク組曲》(1890）や《ピアノのために》(1896–1901)，動きそのものをタイトルとした《映像第 1 集》の〈運動〉(1905）など，舞踊や動きを表現の要素とした作品があること，また,《版画》(1903）や《映像第 2 集》(1907）においてジャワのガムランや日本の蒔絵からインスピレーションをうけたとされるように東洋趣味，ジャポニスムの影響もあったことを関口との接点として挙げておこう。

3–2　表現技法

ドビュッシーは全音音階や五音音階，さまざまな旋法や音程などを音響素材とし，それらを組み合わせて用いた。たとえば《前奏曲第 1 集》の〈野を渡る風〉では，半音（短 2 度）を 1 オクターヴ上と下で急速に反復させつつ，黒鍵のみによる五音音階的旋律を重ね合わせている。《練習曲集》(1913–1915）などドビュッシーは晩年になるにつれて，前述の音階や音程の他装飾音や反復音などを含めて素材そのものを生かし，組み合わせる作品が多くなっていった。関口の素材は紙であり，和紙であり，絵具であり,「それぞれが素材を求め，作り出すこと」(関口 1986：62）を大切にして，

その組み合わせによる作品を探求している点も関口とドビュッシーの接点の一つと考える。

3-3　その他

関口は常々絵に目に見えない３つのもの「空気，背中，気持ち」を描きたいと話していたという。[11] ドビュッシーのピアノ曲にも《前奏曲集》の〈音と香りは夕べの空気に漂う〉,〈霧〉など大気や香りといった目に見えないものを音で表現した作品がある。

「気持ち」の表現としてドビュッシーの発想記号に着目すると，「気持ち」に関すると思われるものは多くない。気持ちである優しさなのか事象の形容である柔らかさと解するべきか判断しづらい doux を除くと，ピアノ曲の中では表１のようなものに限られてくる。

表１　ドビュッシーのピアノ曲の発想記号における気持ちを表す語

語	意味	使用されている曲
amiable	愛想よく	ピックウィック卿をたたえて（前奏曲第２集）
capricieux	きまぐれに	金色の魚（映像第２集） パックの踊り（前奏曲第１集）
douloureux	痛ましく	雪の上の足跡（前奏曲第１集），　エレジー
joyeux	愉快に	対比音のための，オクターヴのための（練習曲集） ヒースの茂る荒地（前奏曲第２集） 「もう森へは行かない」の諸相（忘れられた映像）
mélancolique	憂鬱に	枯葉（前奏曲第２集），レント（忘れられた映像）
regret	後悔	雪の上の足跡（前奏曲第１集）
tendre	愛情をこめて	雪の上の足跡（前奏曲第１集）
triste	悲しく	雪は踊っている（子供の領分） 雪の上の足跡（前奏曲第１集） カノープ（前奏曲第２集）

これら「気持ち」をあらわす発想記号が最も多く用いられ，組み合わされている作品は,《前奏曲第１集》の〈雪の上の足跡〉であり，comme un tendre et triste regret（愛情ある悲しい哀悼のように）などとして，悲しみを表す triste や douloureux, regret が曲中に計５回，愛情をこめての意がある tendre も２回あらわれる。また，doux も気持ちである優しさだとすれば，doux et triste（やさしく，そして悲しく）を用いている《子供の領分》の〈雪は踊っている〉や，très doux（非常にやさしく）が用いられている《前奏曲第１集》の〈亜麻色の髪の乙女〉,《子供の領分》の〈小さ

な羊飼い〉などがあり，関口の題材（雪，女，子ども）や，2-3 で紹介した関口の詩中の「温もり」や「優しさ」,「悲しみ」がドビュッシーと重なってくる。

4. 安部のピアノ曲と関口のきり絵作品の接点

赤坂は関口の絵について「ドラマがあり，詩があり，何よりも人肌の温もりがある。」（赤坂 1986：4）と述べている。安部のピアノ曲もさまざまあるが，ここでは《夢の世界》（1986）を中心に考察する。安部自身による短い詩が各曲の冒頭に添えられたこの曲集は全 22 曲からなり，「いわば自作の台本による臨場感に溢れた貴重なピアノ曲集である」（澤田 2014：123）。

4-1　題材

安部の《夢の世界》はもともと《こどもの夢》という曲集タイトルであった。子どもの目線からさまざまな題材が曲となっており，22 曲中最も多い（動物・虫・鳥）に続いて自然（星空・おち葉・夕焼・雪）や子どもの遊び（まりつき・凧あげ・ブランコ・ボート），機関車や人形の様子が表現されている。関口との接点としては，子どもの遊ぶ姿や自然物が挙げられよう。安部の第 1 曲〈まりつき〉，第 7 曲〈凧あげ〉と，関口の紙風船（1992 年の画集のタイトルともなっている）は，共に日本の伝統的な遊びを題材としている。その他関口の題材である女に関しては「仲良しのミッちゃん」が引っ越してしまう寂しさを表現した第 20 曲〈おわかれ〉を挙げることができようか。[12] また，関口の作品に子どもと共によく描かれた「小犬」は，安部の《夢の世界》第 2 曲〈元気な小犬〉や《こどものえほん》（1967）の第 4 曲〈小犬はじゃれる〉でも登場する。

4-2　表現技法

安部のピアノ曲集《夢の世界》は，「豊かな発想記号，舞踊性のある拍子とリズム，場面や情景及び空間を巧みに想起させる強弱法，明確な速度表示による曲の性格強化と曲中の多彩な速度変化，アクセントの多用による印象づけと叙情的余韻のコントラスト」などにより音楽の斬新さ，新鮮さが印象づけられている（澤田 2014：122）。赤坂のいう関口の作品における「デフォルメされた構図」や 2-2 で述べた「墨」のような黒と他色，光のコントラストが，安部の技法とつながってくるところがあり，各場面や情景を生き生きと描き出している要因となっていると考える。また，簡明さを好んだ安部と，関口がグラフィックデザイナー時代からロゴ作成などで培った簡略化した表現方法も接点の一つと考える。[13]

4-3　その他

関口の作品には1986年の詩画集『風の子』をはじめ，詩が添えられているものが多くある。その詩の文体は安部のものと非常に良く似通っており，たとえば関口の「妙義秋色」は紅葉する故郷の妙義山に向かって，子どもと小犬が駆けている様子で「山のもみじが手招きして／走れ・・・！」（関口 1994：52），「三日月の道」では子どもと小犬が夜道で三日月を見上げ，「月もひとりぼっち・・・／どこまでもついて来て—。」（関口 1994：8）という詩が添えられている。安部の〈元気な小犬〉では「ポチ，それ走れ・・・早いぞ早いぞ……とまって！　こっちを向いてごらん！／あれっ，どこへ行ったんだろう……あっ　木のうしろにいるよ。／出ておいで　それ走って　走って……。」（安部 1986：6）である。感嘆符は作品に臨場感を与え，「・・・」や「……」，「—」は作品に余韻や余白をもたらし，鑑賞者や弾き手と作品をやわらかくつなぐ役目があるだろう。[14] また，これらの詩は一時的な情景ばかりでなくストーリー性があるものや，子どもや擬人化された事物の心情を表しているものも多い。

5. ドビュッシー，安部幸明のピアノ曲を用いた絵本『ゆきおんな』の朗読実践

これらの考察をふまえ，関口の絵による絵本『ゆきおんな』（文：大川悦生）について，その場面や心情に合うと思われるドビュッシーと安部幸明のピアノ曲4曲（A～D）を選び，絵本とともに演奏し，朗読することを試みた。選曲した曲は次のA～Dであり，これらを用いた実践の内容を表2に記す。

A　ドビュッシー：《子供の領分》より〈雪は踊っている〉
B　安部幸明：《夢の世界》より〈元気な小犬〉
C　安部幸明：《夢の世界》より〈おわかれ〉
D　ドビュッシー：《前奏曲第1集》より〈雪の上の足跡〉

Aはタイトルを朗読後に演奏を開始し，B～Dは該当のページとなったところで演奏を開始後，朗読を続けた。A, Bは曲，朗読いずれかが先に終わるが，双方が終わったところで次のページへ進んだ。C, Dでは曲の方があきらかに長いため，朗読は一文ごとに間を開け，Cでは2文目を19小節目から，Dでは2文目を16小節目から，裏表紙へのめくりを26小節目からと曲の構成を参考に設定して朗読する形をとった。[15]

表２　絵本『ゆきおんな』のドビュッシー，安部幸明のピアノ曲による朗読実践

ページ	朗読内容　（　）内は内容の要約	使用曲
表紙	『ゆきおんな』	A
1	文　大川悦生　　絵　関口コオ	
2〜11	ゆきこ　のんのんと　ふって， かぜこも　びゅうびゅうと　ふいて，［以下下記に要約］ （吹雪の中，赤ん坊を抱いたゆきおんなが老夫婦を訪ね，赤ん坊を預けたとたん姿を消す。）	
12〜13	（赤ん坊を預かり喜ぶ老夫婦。ゆきと命名。）	―
14〜15	（ゆきの成長と，村の子どもや小犬と雪の中で元気に遊ぶ様子。）	B
16〜17	そのかわり　なつが　くると，いえの　なかで　じいっと　していて， だれとも　あそびは　しませんでした。 おまけに，ゆきは　おふろへ　はいるのが　きらいでしたって。	―
18〜19	「これ　ゆきや。たまには　ふろさ　はいれよ」 ばあさまがなんべんいっても，くびを　ふるばかり。 ある　ばん，じいさまと　ばあさまは，ゆきが　かなしそうに　いやだと　いうのを，むりやり　おふろへ　いれさせましたと。	C
20〜23	（お風呂からでてこないゆき。心配した婆様がお風呂の中をみるとゆきの姿はなく，湯の上に白いあぶくのみ。）	―
24	じいさまと　ばあさまは　かなしくて，それから　ふゆに　なるたび， むすめが　もどって　くるのを　まちました。 いまでも　まだ，まっているのかも　しれません。	D
裏表紙	―	

6. まとめ

関口のきり絵と，ドビュッシー，安部のピアノ曲で共通している点は，子どもや自然を題材としていること，そして「それぞれが素材を求め，作り出」し，組み合わせることによって，生き生きとした臨場感ある表現につなげていることである。また，関口が表現しようとした「気持ち」について，関口の詩やドビュッシーのピアノ曲における発想記号をもとに，「温もり」，「優しさ」，「悲しみ」という共通のキーワードを見出すことができた。関口や安部が作品に添えている詩は，それぞれの作品のもつストーリーや，子どもや擬人化された事物の心情を臨場感ある表現で伝え，鑑賞者や弾き手と作品とをやわらかくつなぐ役目を果たしていると考える。

ドビュッシーと安部幸明のピアノ曲を用いた，絵本『ゆきおんな』の朗読実践においては，関口，ドビュッシー，安部の共通の題材（雪，女，子ども）と各場面の情景（雪，風）や人（女，子ども），心情（悲しみ，さびしさ）の表現要素が互いに結びつ

き，文学，美術，音楽のジャンルを超えた表現の可能性の一つを示すことができた。とくに最後の場面では，ドビュッシーのピアノ曲の中で最も「気持ち」があらわされている〈雪の上の足跡〉（表２のＤ）と，その情景や心情が見事に一致した。このことは，関口が『ゆきおんな』のきり絵作品ばかりでなく，自身の幼少の頃と重ね合わせ，子どもたちが「表にしないだけ」である「悲しみやさびしさ，孤独感」を「訴えたい」として作品を残したこととも呼応してくる部分がある。[16]

7. おわりに

考察をすすめる中で気づいたことがある。関口のきり絵とピアノという楽器の特質，奏法との関係である。ピアノは一度打鍵（弦）すれば，その後はペダルにて操作をしない限り，音質や音色を変えることは出来ず，次第に音は減衰し，消えてゆく。ナイフで紙を切ることと，指先でピアノを打鍵すること，それはいずれもやり直しの効かない一瞬の表現技法である。そしてその一瞬の連続により形が造られ，音楽となり，臨場感ある何かがうまれる。その一瞬に何をかけ，その一瞬をどう紡ぎ，何を表現していくのか。ピアノを使った表現者の一人として今回の考察をもとに探っていきたい。

謝辞

本稿は，2013年10月20日のドビュッシーピアノ作品全曲演奏シリーズ「ドビュッシーと音楽散歩　Part2～きり絵作家　関口コオ氏の作品とともに」（於：ピアノプラザ群馬）と，2019年11月2日から2020年2月3日に行われた企画展『関口コオいつかきた路』における2020年1月26日のイベント「お話＆ピアノ演奏　snow is dancing　～関口コオ作品にみる動き・光・憧憬～」（於：安中市学習の森ふるさと学習館）をもとに，考察したものである。多くの方のご協力を賜ったが，これらの機会にご尽力・ご協力をいただいたピアノプラザ群馬の中森隆利氏と志村秀治氏，関口コオきり絵美術館の並木敬子氏，安中市学習の森ふるさと学習館の阿部里美氏，陶芸家青木昇氏，新島学園短期大学コミュニティ子ども学科学生志賀稚菜さんに格別の感謝を申し上げたい。

資料　関口コオ　略年表

1937（昭和 12）	2 月 27 日　群馬県碓氷郡原市町（現在の安中市原市）に生まれる。本名，武井功吉。
1957（昭和 32）	デザインを佐股哲兵（日輝会），洋画を豊田一男（主体美術）に師事。
1960（昭和 35）	イラストレーターとして独立。グラフィックデザイン活動に入る。
1970（昭和 45）	関口コオデザイン事務所を設立。
1975（昭和 50）	きり絵作家としてきり絵の創作活動開始。
1976（昭和 51）	初のきり絵画集「ふるさと」を発表，個展を開催。
1978（昭和 53）	前進座「心中天網島」全国公演のポスター，パンフレットをきり絵で製作。日本きりえ協会結成に参画。
1979（昭和 54）	デザイン活動を完全に中止。きり絵作家活動に専念。関口コオを囲む会発足。
1980（昭和 55）	日本観光ポスターコンクールで「ほのぼの群馬・上州の四季」銀賞。
1983（昭和 58）	初の自選作品集『からっ風の子守唄』（あすか書房）刊行。全国縦断展開催。『安中御城内御諸士御遠足の図』
1985（昭和 60）	利根・沼田関口コオ後援会，関口コオ後援会（高崎）発足。
1988（昭和 63）	「関口コオきり絵美術館」（沼田市）開館（～2006）。
1989（平成元）	関口コオとふるさとを学ぶ会（安中）発足。
1990（平成 2）	絵はがき「関口コオふるさと紀行」。関口コオと碓氷の自然に親しむ会（松井田）発足。
1991（平成 3）	群馬県教育文化功労総合表彰受賞。
1994（平成 6）	パラオ共和国独立記念式典に出席。記念切手原画をナカムラ大統領夫妻に寄贈。
1996（平成 8）	交通安全カルタ（群馬県自動車販売店協会）。松井田中央公民館にてきり絵教室開催（～2004）。コルメナールビエホ市（スペイン）芸術功労賞受賞。
2000（平成 12）	高崎市制 100 周年記念「高崎かるた」絵札装画。
2002（平成 14）	群馬県教育文化功労賞表彰。
2010（平成 22）	「関口コオきり絵美術館」（高崎市）開館。
2011（平成 23）	高崎市公民館各所にてきり絵教室実施（～2012）。
2018（平成 30）	6 月 29 日　81 歳にて逝去。

注

1　「切り絵」が一般的であるが，関口のほとんどの画集や美術館の名称等に「きり絵」を用いている実態から，本稿では「きり絵」に統一する。

2　関口コオきり絵美術館の並木氏によれば，きり絵は工芸分野に分類され，作家と呼ぶのが通常であるが，関口本人はきり絵における絵画の要素を重要視し，画家と呼ばれることを望んでいたという。

3　「ドビュッシーと音楽散歩」はピアノプラザ群馬（高崎市）にて筆者がドビュッシーのピアノ

作品全曲を演奏しながら様々な分野のゲストによるプレゼンテーションや作品とのコラボレーションを通してドビュッシーの音楽の魅力に迫る企画シリーズで，2013 年 2 月より 2018 年 10 月まで計 10 回開催された。

4　これら安部幸明およびドビュッシーのピアノ曲と，関口コオのきり絵との出会いから，2014 年 1 月に両作曲家作品を収めた筆者の CD『夢の世界／子供の領分』ジャケットに関口のきり絵「蝶」を使用した。

5　きり絵の魅力についてのインタビューで，関口は「私は長い間デザインの仕事をして，油絵なんかも描いてきたわけですけれど，きり絵をやるようになって，画面が生き生きとしてきましたものね。」と述べている（関口 1986：53）。

6　2013 年 10 月 20 日の「ドビュッシーと音楽散歩」にて，関口コオきり絵美術館の並木氏により，関口の「切り口」に対するこだわり，たとえば内側に向けるか，外側に向けるかなどが紹介されている。また同年筆者による関口へのインタビューにおいてもきり絵において大切にしていることは，との問いに関口は「切り口の質感」と答えている。

7　関口は「役者，書家，画家。将来はこの三つの中の一つを自分の仕事として決めていた。」という（関口 1983：114）。

8　関口 1994：3。詩中の「／」は実際の詩での改行を示す。以降同。

9　『関口コオ　きり絵の世界』（1997）からの引用であるが，ページ表示がなく，童の世界―，風景の世界―，女の世界―という 3 つの見出しの中，「女の世界―」のページの冒頭に記されているもの。

10　2013 年 10 月 20 日「ドビュッシーと音楽散歩」での並木氏のコメントによる。

11　2013 年 10 月 20 日「ドビュッシーと音楽散歩」での並木氏のコメントによる。

12　安部の《夢の世界》の〈おわかれ〉には「仲良しのミッちゃん　遠いところへ　ひっこしちゃうのよ，さびしいわ。大きくなったら，きっとまた　あおうと，やくそくしたの，でも　さびしいわ。」という詩が添えられている（安部 1986：40）。

13　2013 年 10 月 20 日「ドビュッシーと音楽散歩」で並木氏により，関口のデザイナー時代のロゴ作成などにおける簡略化された表現が，きり絵においても反映されている可能性が紹介された。

14　安部の《夢の世界》は「やさしいこどものピアノ曲集」という副タイトルがついており，子どもたちがピアノの習学に用いるためのものであることが「まえがき」からも明らかである。よって，各曲に添えられた詩は弾き手である「こども」のためであると考える。

15　実践当日（2020 年 1 月 26 日，安中学習の森ふるさと学習館）は鑑賞対象者を 50 名以上予定していた為（73 名来場），絵本実物ではなく，ピアノ（演奏者）と朗読者の間にスクリーンを配置し，絵本の各ページをスクリーンに投影する形で実施した。

16　関口はきり絵集『わらべの詩』のあとがきに次のように記している。「こゝに描き出されたわらべの情景から，過ぎ去りし昔への回帰，さびしさや悲しみの想い出にも浸っていたゞけたらと思います。最近，私の作品が暗くさびしくなったとの声を聞くが，思うに子供は決して明るい元気さだけではなく，悲しみやさびしさ，孤独感をおぼえつつもそれを表にしないだけではないのか，そんな気がしてならないのです。現代社会においては尚のことそれを感じるのです。それを訴えたい，私の今の思いをそのまゝ描いているだけなのです。」（関口 1994：62）

引用・参考文献

Debussy, Claude. Œuvre complètes de Claude Debussy, Série I, Volume 1, Paris: Durand, 2000.

Debussy, Claude. Œuvre complètes de Claude Debussy, Série I, Volume 2, Paris: Durand, 1998.

Debussy, Claude. Œuvre complètes de Claude Debussy, Série I, Volume 3, Paris: Durand-Costallat, 1991.

Debussy, Claude. Œuvre complètes de Claude Debussy, Série I, Volume 4, Paris: Durand, 2004.

赤坂治績 「序―関口コオさんのこと」『関口コオ／切り絵詩画集　風の子―季節の中のこどもたち―』あすか書房，4-5，1986.
安部幸明 《やさしいこどものピアノ曲集　夢の世界》全音楽譜出版社，1986.
安中市学習の森ふるさと学習館編 『第 21 回企画展　関口コオ　いつかきた路』安中市学習の森ふるさと学習館（安中市教育委員会文化財保護課），2019.
片山杜秀　CD 解説『安部幸明　交響曲第 1 番／シンフォニエッタ他』，Naxos，2007.
澤田まゆみ 「安部幸明作曲　やさしいこどものピアノ曲集《夢の世界》について」新島学園短期大学紀要 34，111-126，2014.
関口コオ 『関口コオ作品集　からっ風の子守唄』あすか書房，1983.
関口コオ 『関口コオ／切り絵詩画集　風の子―季節の中のこどもたち―』あすか書房，1986.
関口コオ 『関口コオきり絵集　紙風船』あすか書房，1992.
関口コオ 『関口コオきり絵集　わらべの詩』あすか書房，1994.
関口コオ 『関口コオ　きり絵の世界』あすか書房，1997.
日本幼年教育研究会編 『ゆきおんな』名作おはなしメイト第七巻第九号，メイト保育事業部，1989.
安川加寿子校註 『ドビュッシーピアノ曲集　Ⅰ』音楽之友社，1960.
安川加寿子校註 『ドビュッシーピアノ曲集　Ⅱ』音楽之友社，1960.
安川加寿子校註 『ドビュッシーピアノ曲集　Ⅲ』音楽之友社，1960.
安川加寿子校註 『ドビュッシーピアノ曲集　Ⅳ』音楽之友社，1962.
安川加寿子校註 『ドビュッシーピアノ曲集　Ⅴ』音楽之友社，1969.
安川加寿子校註 『ドビュッシーピアノ曲集　Ⅵ』音楽之友社，1975.
安川加寿子校註 『ドビュッシーピアノ曲集　Ⅶ』音楽之友社，1974.
安川加寿子校註 『ドビュッシーピアノ曲集　Ⅷ』音楽之友社，1977.